

『美学論究』 掲載論文総目次（第一編—第三十六編）

第一編（一九六一年九月二十日）

信貴山縁起繪卷の南都的作風

比較音楽学の沿革と方法

表現における現実の問題

音楽の理解可能性について

河村岷雪の「百富士」と北斎の富嶽図

鳳凰堂の裝飾意匠

ジャック・コポーについて

—— ヴィユー・コロンピエ座創設まで ——

室生寺派とその展開について

—— 貞観彫刻に於ける流派の研究 ——

研究室雑録

第二編（一九六二年二月二十日）

真光寺本遊行縁起繪卷の作風

音楽美学の成立と展開

クレール研究序説

—— 作家の作風形成期の考察 ——

岩佐勝重研究序説

日本原始文様序説

—— 呪術と文様 ——

延暦期木彫群について

—— 素木像成立に関する一つの疑問 ——

音楽における象徴概念について

Carl Philipp Emanuel Bach の Clavichord 音楽について

Théâtre du Vieux-Colombier の誕生

研究室雑録

第三編（一九六三年十二月二十日）

日本における南画の勃興

音楽の享受と作品

播磨国報恩寺の宋風仏像彫刻について

英賀神社社藏天神縁起絵について

ヴィユー・コロンピエ座第一次大戦勃発まで

鳥羽勝光明院の造仏をめぐる問題

—— 藤原彫刻の創造における貴族の役割 ——

イギリスのマドリガル研究の課題

—— Joseph Kernan の研究論文を中心に ——

源 豊宗	吉村元雄
張 源祥	吉田友之
今 井 清	
谷 村 晃	浅野 隆
磯 博	谷村 晃
吉 村 元 雄	大和 芳子
大 和 芳 子	
吉 田 友 之	源 豊宗
	張 源祥
	磯 博
	吉 田 友 之
	清 水 芳 子
	齊 藤 孝
	浅 野 隆

研究室雜録

ドイツ通信

谷村 晃

音楽作品のあり方とその認識

播州の蕭白画について

三木市金剛寺蔵の競馬・遊楽凶屏風

林 幹徳  
松尾 勝彦  
磯 博

第四編（一九六六年十二月二十日）

源 豊宗教授退任記念号

相阿弥の芸術

源 豊宗

音楽の二つの世界

谷村 晃

伝統の構造

吉田 友之

——バレイソンの講演録から——

第一次世界大戦中のコポー

清水 芳子

東寺西院八幡三神像の作風

斉藤 孝

——貞観彫刻における、いわゆる密教様の問題——

源教授を送る

張 源祥

美学研究室雜録

Einige Editionsprobleme in der japanischen Musik

谷村 晃

フェルメールとレアリスム

文学作品の解釈

演劇における演劇性

——詩劇と現代演劇を中心にして——

トレス海峡諸島音楽調査

——サーズデイ島、ヤム島、ヨーク島調査記——

ドビッシーにおける旋法性

——フォーレとの対照において——

清水 芳子

畑 道也  
永田 彰三  
田中 幸子  
師子堂 恵信

矢追 章二郎

浅岡 潔

谷村 晃

中山 明慶

畑 道也

## 第七編（一九八四年十二月十日）

（遺稿）映像の性格

——ノルマンディ海岸を走って——

新羅の古都慶州への旅

メルロー・ポンティの言語論と後期哲学  
ヴァージナリストの変奏曲について

『伊年』印章花園」序

円山応挙の写生と筆技に関する一考察

小山 義美

磯 博

三好 栄三

村田 公一

皆見 敦子

山西 健夫

楽曲分析に基づく音楽学習試論

——ピアノ学習の初級課程における声部書法分析と解釈——

橋本 斉

第十編（一九九五年三月二十五日）

文化としての映画と演劇

十六世紀のハンガリー人宮廷音楽家バクファルク

——バルトーク、コダーイに先駆けた声楽に基づく器楽の作曲——

福岡市博物館蔵「柿本人麿像」について

江戸時代初期における輸出漆器の多様性について

永田 彰三

富浪 貴志

下原 美保

波田 よし子

## 第八編（一九九〇年三月二十日）

Maurice Merleau-Ponty/Jackson Pollock

ジャック・ラカンにおける他者と主体の論理

トレス海峡諸島の音楽とポリネシア

ナチ・ドイツ初期の映画政策

三好 栄三

高瀬 博文

畑 道也

福原 正行

音楽分析の効用

——アドルノのシェンカー理解をめぐって——

Temperatur と音律

カント『判断力批判』における音楽思想について

木村 直弘

笹野 祐子

三村 利恵

## 第九編（一九九二年三月二十日）

一七六五年のデイドロのサロン批評

ヘーゲル哲学の〈叙述〉(Darstellung)

「天狗草紙」考

——画中詞等からみた原本における鑑賞法と享受者——

野口 榮子

松井 泰典

下原 美保

一八世紀のフランソア一世  
方法としての『明るい部屋』東大寺法華堂不空羼索観音像と随具像についての  
一試考

野口 榮子

松井 泰典

中西 真美子

メルスマン音楽論再考

橋本 斉

——エネルギー説の再検討に向けて——

レオナルド・ダ・ヴィンチの〈最後の晩餐〉の

解釈について

播磨 淳子

第十二編（一九九七年三月二十日）

屏風絵の藤

永田 雄次郎

——貫之の屏風歌の美術史的意味——

中山法華経寺蔵「春日山蒔絵箱」について

近藤(渡辺)利江子

ポスト・モダニズムの演劇表現

永田 彰三

——その詩的イメージ——

調性音楽における無調的側面

富浪 貴志

——W・A・モーツァルトとF・リストの作品を例にした一考察——

第十三編（一九九八年三月二十日）

チップペンデールの家具

野口 榮子

——イギリス十八世紀におけるデザインの問題——

屏風絵と色紙形

永田 雄次郎

——絵画と文学の懸け橋——

蕪村絵画の特質

岡村 知子

——そのテーマと表現——

研究資料

岩佐勝重筆 福井城本丸御殿鶴の間の襖絵

磯 博

チャールズ・アイヴズの歌曲における

旋律と伴奏の関係

服部 智行

——《ウェスト・ロンドン》分析——

第十四編（一九九九年三月二十日）

土田麥僊のヨーロッパ

上田 文

——渡欧による芸術観の変化について——

フリーア本東北院職人歌合絵巻について

岡 泰央

19世紀末のトレス海峡諸島マリー島の音楽

畑 道也

——C. S. MYERS の報告をめぐって——

E. F. Fenolosa and the Importation of Aesthetics into Japan

図形楽譜の目指すものとその限界

加藤 哲弘

——ジョン・ケージによる記譜法の実験——

第十五編（二〇〇〇年三月二十日）

春日大社古神宝「蒔絵箏」についての考察

猪熊 兼樹

制度としての美術史学とその研究対象

19世紀前半における音楽享受と「宗教的な音楽」

浄土教における音楽思想とその展開

——浄土三部経と往生伝を中心に——

近代日本画史における「平八郎様式」

——福田平八郎筆《漣》を中心に——

第十六編（二〇〇一年三月二十日）

「一遍聖絵」景観考

『詩と音楽』および『アルス音楽大講座』

にみる山田耕稼の歌曲作曲法

イサム・ノグチ・太陽及びヴォイドシリーズ

についての考察

日本歌曲に於ける日本語の問題

——團伊玖磨の歌曲を中心とした一考察——

第十七編（二〇〇二年三月二十日）

「ふしみ殿」銘辻が花裂をめぐるって

光悦書俵屋料紙の様式的展開

——元和・寛永期の作品を中心として——

加藤 哲弘

三村 利恵

岩 堀 智美

岡 崎 麻 美

枢府白磁について

ダリウス・ミヨーの弦楽四重奏曲

初期作品における主題の諸相

カンディンスキーと神智学

——影響と摂取——

第十八編（二〇〇三年三月二十日）

美学科創設五十周年記念号

大和絵瞥見

——「源氏物語絵巻」東屋第一段を中心として——

歌川広重の描く「日本橋図」考

——その実景表現をめぐるって——

狩野内膳と南蛮屏風

——その画風の確立と継承——

境界の装置としての蝶鳥文様

村上 恭子

長谷 規子

西川 啓司

永田 雄次郎

山本 野理子

塚本 美加

山内 麻衣子

畑 道也

滝川 絵奈

井上 宏行

一九七〇年代末のトレス海峡諸島音楽にみられる

多声性について

アバンギャルド演劇の均質性

ゲンスブールのシャンソンにみられる英米文化の影響

中世フィンランド ラテン語聖歌集

Piae cantiones についての一考察

畑 道也

永田 彰三

久保 菜生子

中藤 有希

河上 繁樹

甲野 博子

—— J. Sibellus と H. Klementi の編曲をめぐって ——  
もうひとりのヘロデ

小嶋 洋子

—— リケッツとピアズリーをめぐる考察 ——  
戦前におけるグラフィックデザインとその時代

下村 朝香

—— 今竹七郎の仕事 ——

第十九編 (二〇〇四年三月二十日)

天寿国續帳について

曾布川 直子

伊藤若冲制作の「拓版画」作品について

後藤 健一郎

—— 《素絢帖》、《玄圃瑤華》を中心に ——

パリのアメリカ先住民

加藤 哲弘

—— カントの『判断力批判』における具体例の役割 ——

ヴィクトル・バシユの「芸術学」について

片山 学

箏曲における段物の研究

勝部 葉子

—— 組歌との奏法の比較を中心に ——

第二十編 (二〇〇五年三月二十日)

歌川広重をめぐって

永田 雄次郎

—— 加藤一雄の眼 ——

上方の浮世絵の発生と展開

山口 真有香

—— 役者絵を中心に ——

十六世紀の武家男子における文様染の昇格をめぐって 山門 貴子

平均的イメージとフォトグラム 岩城 覚久

—— ドゥルーズ『シネマ』の出発点と映画原理への一考察 ——

市川崑の映画作品における視点の分散と集中について 中野 靖子  
ジョルジュ・オーリック 久保田 政宏

—— 「フランス六人組」時代の作品に見るコクトー解釈 ——

『用心棒』とジャンル 橋本 淳

第二十一編 (二〇〇六年三月二十日)

ラファディオ・ハーンと浮世絵 永田 雄次郎

—— 江戸時代へのあこがれ ——

平安時代の「男絵」について 小林 学

—— 史料の考察を中心として ——

ヨハネス・ブラームスの旋律形成に関する一考察 小味 潤彦

「映画作家」クリント・イーストウッド 中村 聡史

—— 視線の「モチーフ」とその変化 ——

バルテュス《街路》における人物像と空間表現 松野 敬文

—— 『稚拙さ』という見地から ——

第二十二編（二〇〇七年三月二十日）

伊丹万作と山中貞雄の喜劇観

桑原圭裕

ゲインズバラ《アンドリュース夫妻》に描かれた

近代的農法

嶋田祥子

R・シューマン《リーダークライス op.39》小考

網干毅

第二十四編（二〇〇九年三月二十日）

——「胚」音型としてのE-H-E——

橋本淳

『荒野のダッチワイフ』

中村聡史

『蜘蛛巣城』とジャンル

橋本淳

——大和屋竺の「ハードボイルド」スタイル——

「メロドラマ」映画についての一考察

中村聡史

文様研究の理論的基礎

加藤哲弘

——「見えないもの」の視覚化への試み——

遠藤友美賀

「アニメ美少女」とは何か？

松野敬文

——プファウのマトリックス理論に関する批判的考察——

——リールによる「様式への問い」をめぐる——

第二十三編（二〇〇八年三月二十日）

「江戸時代の小袖に関する復元的研究」について

河上繁樹

——劇場版2作品を中心に——

桑原圭裕

——関学アート・インステイチュートの研究から（Ⅲ）——

アニメーションの日本の表現

阪上由紀

貞享・元禄期の友禅染について

高木香奈子

——「ベルサイユのばら」を例として——

自画像に見るエイキンズの自己表象

武内利夫

E・エルガーの円熟期における交響曲と

道廣真衣

——《ムクドリ狩の狩猟をする画家とその父親》（1874）を中心に——

A・スクリャーピンのピアノのための「前奏曲」

秋庭佳代子

ヴァイオリン協奏曲

道廣真衣

——和声語法の観点からの考察——

バルテュス《鏡のなかのアリス》（1933）における

松野敬文

博物館資料から見た小袖

河上繁樹

「稚拙派」

松野敬文

——展示・修復・復元に関する諸問題——

第二十五編（二〇一〇年三月二十日）

上村松園の初期作品《花ざかり》についての一考察 國永裕子

没入感と浮遊感 岩城覚久

——『ディヴィナ・コメディア』（1991）——

バルテュス《河岸（ボン・ヌフの近くの堤）》（1929）

における人物像と風景の描写

——「稚拙さ」という見地から——

北欧における十八世紀後半の音楽の様相

——エリク・トゥリンドベリ旧蔵楽譜に着目して——

研究ノート

「ピアノのためのマズルカ」の成立

——Biblioteka Narodowa 所蔵の資料調査——

第二十六編（二〇一一年三月二十日）

研究ノート

文化学園服飾博物館蔵『古錦帖』所収の

平安様緯錦にみられる中国遼代染織品からの影響

論文

ヴァールブルクとヴィックホフ

——ヴィッラ・ファルネジーナにおける連続的物語叙述をめぐって——

『新少女』における夢と少女とキリスト教

ジャン・ユスターシユ映画に見る表現上の特性 安部孝典

野田秀樹にみる悲劇性 坂本涼平

——「キル」、「パンドラの鐘」、「オイル」に共通する構造から——

『転調の秘訣』におけるソレルの転調理論

——「素早い」と「ゆっくりとした」について——

第二十七編（二〇一二年三月二十日）

論文

「彦根屏風」の成立に関する一試論

——図様の転用をめぐって——

新聞錦絵の絵画的表現

——蕙斎芳幾による「東京日々新聞」を中心に——

近現代における染織文化財の価値形成について

ゴッヤンの《浅瀬（逃走）》における意味の多重性

について

A. ソレルの『転調の秘訣』に関する論争

——A. ロエルによる批判とソレルの返答——

舞踏における「重力」

——土方巽と大野一雄による身体表現の共通点と差異——

加藤 哲弘

小嶋 洋子

宮内 晴加

宮内 晴加

宮内 晴加

宮内 晴加

宮内 晴加

林 茂郎

林 茂郎

林 茂郎

原山 詠子

原山 詠子

原山 詠子

河上 繁樹

河上 繁樹

田中 可手奈

田中 可手奈

宮内 晴加

宮内 晴加

藤田 明史

藤田 明史

藤田 明史



第二十八編（二〇一三年三月二十日）

論文

小林清親の戦争錦絵についての一考察

田淵房枝

——明治錦絵の新展開——

《硫黄島の星条旗》

加藤哲弘

——勝者と敗者の情念定型——

大正期における寶塚少女歌劇の構成と主要歌曲

阪上由紀

——『寶塚樂譜』掲載作品を中心に——

手紙の影と、失われた影

川崎辰洋

——ムンクの《思春期》第1バージョンと、それに関する手紙——

レンブラント作《バテシバ》の画像源泉とモデル

国清景子

第二十九編（二〇一四年三月二十日）

論文

明治時代における鎗木清方の作品制作

新井美那

——浮世絵受容の観点から——

古裂に、学ぶ

河上繁樹

——齋藤コレクション寸描——

現代日本におけるファッションショーの構成と内容

山上枝里子

——東京コレクションと東京ランウェイを例として——

第三十編（二〇一五年三月二十日）

論文

関西学院原田の森キャンパスの景観と海港都市神戸

永田雄次郎

——山田耕筈、稲垣足穂は語る——

一九六〇年代のドウミ作品における音楽

倉田麻里絵

ファイト・シユトース作《フォルカマーの記念碑》

藤井泉

——〈ゲツセマネの祈り〉を中心に——

第三十一編（二〇一六年三月二十日）

論文

江戸時代の通人にみる「いき」の装い

河上繁樹

明治時代中期以降におけるケーブ付外套の変遷

樋口温子

ブルクハルトの美術史研究とその反時代性

加藤哲弘

第三十二編（二〇一七年三月二十日）

論文

アンサンブル・フィルムにおける物語世界の内と外

桑原圭裕

映画における「見る／見られる」の反転

安部孝典

——ゴダール映画を手がかりに——

レンブラント 1669 年作《神殿のシメオン》

国清景子

——変遷の最後に表象されたもの——

第三十三編（二〇一八年三月二十日）

論文

私だけの「日本美術史ノオト」から

永田 雄次郎

——「源氏物語絵巻」「紫式部日記絵巻」に導かれて——

近代化する日本に生きる人々の眼

田淵 房枝

——小林清親の錦絵を通じて——

芸阿弥筆「観瀑図」についての一考察

新井 美那

——十五世紀後半の詩画軸にみる五山思想をめぐって——

第三十四編（二〇一九年三月二十日）

論文

再考、平安時代の錦はどこから来たのか

河上 繁樹

調査報告…契丹・駙馬贈衛国王墓出土染織品

について

福本（桑原）有寿子

レンブラント1654年作《ヤン・シックスの肖像》

における粗い仕上げの役割

国 清景子

舞踏とアンガラ演劇のはざま

藤 田 明 史

——1960年代における舞台芸術の境界線——

ウオーターハウス作《ヒュラスとニンフたち》

における花の図像

伊 藤 ちひろ

——睡蓮の両価的解釈をめぐって——

第三十五編（二〇二〇年三月二十日）

論文

第三十五編（二〇二〇年三月二十日）

楽器分類における「ハーディ・ガーディ属」の定義

木村 遥

——構造的要素および歴史の変遷に基づく分類の試み——

江戸時代後期における古画の考証について

下原 美保

——松浦静山著『新增書目』を例に——

F・メンデルスゾーンのピアノ作品における

「緩急2部分構造スタイル」完成への過程

小石 かつら

——習作群および《ロンド・カブリッチオーン》

MWV U 67に見る対照と連続——

19世紀イギリス中産階級における古代エジプトの

イメージ

関根 春花

——ローレンス・アルマ・タデマの求愛作品——